



情報資源としての記録史料

—駿河台大学文化情報学部における
レコード・アーカイヴズコース—

昭和53年春、国立大学共同利用研究機関に衣替えしていた史料館に着任した私は大型計算機が利用できるものと考えていた。しかし史料館は電算機のようなものは導入しないという宣言を聞いて愕然としたことを思い出す。電算機を利用しない共同研究機関は存在意義を失う恐れがある。それだけが理由となった訳ではないだろうけれど、昭和57年、行政監察の結果報告は史料館の存続を疑うものであった。

また着任した年の夏、英国において地方文書館を見学し、またアーカイヴズ関連参考図書を多数購入し、第2次世界大戦後の新しい動きに接することができた。それは植民地の独立という状況の中で、ユネスコとICAが新興独立国のために積極的に資料保存のための施設企画に協力しているという姿であった。ユネスコ本部にはPGI総合情報企画部があり、そうした新興独立国における図書館、ドキュメンテーションセンター、そして文書館の設置についてのガイドラインや理論的実務的研究報告書を刊行していた。特に文書館についてはRAMPレコード アンド アーカイヴズ企画が特設されていて活発に活動していることを知った。

行政監察報告をはねかえすための様々な仕事の中で、パソコンレベルではあったものの、史料所在データベース作成を始めた。またそれまでの史料取扱講習会を史料管理学研修会に改め、大学共同研究機関における大学院相当教育課程としての第一段階を構築した。情報資源としての記録史料という認識を活用した成果であると考えたい。

こうした経歴が認められたかどうか定かではないが、1992年春、学校法人駿河台大学理事会から情報学部設置への協力を求められた。学部構想を起草し、承認を得た上で、学部設

置委員会を組織し、数人に協力を得ながら、学科目の細部や人事を詰めて、その年の5月設置申請書を提出した。異例の早さといわれたが、史料館での経験やユネスコとICA、その他、各国の情報専門職養成についての研究が、ここで役に立ったのだと思う。

はじめに提出した情報資源学部および大学院という構想は、第1段階としての学部設置に絞られ、景観観光情報資源管理、音響映像情報資源管理、活字刊行物情報資源管理、記録史料情報資源管理という4つのコースを置くことにした。景観観光は人間の情報受容の最初は感覚的なものであり、景観環境から受ける刺激はその人の原体験を形成する重要な要素であり、かつ他の三つの分野が内への旅、もしくは時間への旅を意味するのに対し、外への旅、もしくは空間への旅を置くことでバランスを取りたいという思いがあった。

いずれにしても四つの分野における情報資源管理とは、今日、情報媒体が言葉、身ぶり、文字、電気信号などなど、様々な形で併用共存しているのに対応させ、無限大化する情報資源を適切かつ有効に情報需要者に提供するためには、何が必要かをわきまえている人材を要求している。そうした様々な分野での情報専門職にふさわしい人材を、情報メディアイーターと総称することにした。つまりこれまでツアリングコンダクター、司書、学芸員、ドキュメンタリスト、データベースサーチャー、アーキヴィスト、などなど分野毎に細分化されていたものを、情報という共通項で括ったということになる。

情報化社会とはまさにこうした情報専門職が活躍する世界なのではなかろうか。

安澤秀一・駿河台大学